

平成26年8月20日(水)

老球の細道50号

「無茶」ではなく「無理」をしよう

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

人の名前というものはその子に対する親の想いが十分に込められていると思う。私は初めての子どもが生まれるなら、絶対に「秀仁(シュート)」と命名しようと密かに思っていた。女の子は一切頭になく、男であることをかたくなに信じていた。そして、私が果たせなかったバスケットボールへの夢を名前と共に息子に託そうと意気込んでいた。しかし、この壮大な試みも鬼嫁からの一喝でストップ。「わざとらしいからダメ!」。「いや、シュート(秀仁)でいく!」と無理を通せなかった。当時の私は地球にやさしく、妻にもやさしい夫だったのである。その無理を通せないやさしさが災いしてか、今だに勝負の大舞台で結果を出せないでいる。

前任校のバスケット部員に「大地」という名前の生徒がいた。「大地」のいう命名は、おそらく1988年のソウルオリンピック100メートル背泳ぎで金メダルを獲得した鈴木大地選手への想いが関係しているのではと思ったことがあった。同じ学校にいた彼にそっくりのお姉さんにたずねたら、「大地」の命名のルーツをあかしてくれた。やはり金メダリスト鈴木大地選手であった。ご両親は鈴木大地選手のようにスポーツで活躍する人間になれという想いを名前に託したのだろうか。それとも他に……?

スポーツ評論家の二宮清純氏の新聞コラムがある。氏は辛口の評論を書くが、常に的を得た内容で、いつも勇気を与えてくれるライターである。『唯我独論』というコラムだが、心に響くところがあったので切り抜きを取っておいた。ソウルオリンピック鈴木大地の奇跡の金メダル秘話である。

「(前略) スポーツでは大舞台で結果を出した選手は例外なく『無理』を通してのいる。ソウル五輪100メートル背泳ぎ決勝。鈴木大地の金メダルはまさしく無理を地で行くものであった。通常、大地はタイムにして12秒、水中でのキック数21回で25メートル付近に浮上していた。ところがライバルのバーコフ(米国)が予選で世界新を出したことで大地の必勝パターンは意味をなさなくなった。そこで大地はのるかそるか大バクチに打って出る。21回のバサロを27回にし、バサロの距離を5メートルも伸ばしたのだ。これが見事に凶に当たった。冒険を恐れて安全策を採っていたら間違いなく彼は失意の水に沈んでいた。しかし、『無理』と『無茶』は違う。『無謀』はもちろん違う。『無茶』には一切の勝算がなく、『無謀』は思考を放棄したせつなの自爆。若者よ『無理』をしろ。その先に栄光はある」

あちこちから「無理しないでね」という魔法の言葉を浴びせられる昨今、その魔法にかかっていると心身共に現状維持をダウンさせることにもなりかねない。私は今、無理をしてトレーニングしているからまだシュートは入る。無理をして色々読んだり、書いたりしているから多少ボケないでいられる。老化防止とは無理をすることだ。

いわんや現役バリバリの選手やコーチ達は、現状維持のぬるま湯から脱却するために買ってでも「無理」をしよう。栄光を追いかけ、歴史を創る使命感に燃えた人間は、いつの時代でも常識に縛られず「無理」をきかせた強者たちだ。